

Title	Turgeonの価値論に関するGaétan Pirouの批評に就て
Sub Title	
Author	永田, 清
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1928
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.22, No.2 (1928. 2) ,p.283(97)- 291(105)
JaLC DOI	10.14991/001.19280201-0097
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19280201-0097

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

號曰天穡田。天川依田。天口銳田。此皆穡地。雨流之旱則弗之。故素戔嗚尊於害姉田。春則廢渠槽及埋溝毀畔。又重播種子。秋則捕穢狀馬。

を引用して六條の罪を説明してある。それによる第一は廢槽で、ヒハナチといひ、神田に注ぐ水道の樋を取除けること、第二は埋溝即ちミソツメ第三は毀畔即ちアハナチ、第四は重播シキマキとて、他人の種を蒔きたる田にさらに又畝を重ねて播くことなりとし、第五は捕穢即ちクシサシにて、耕種の節、竊にその田に往きて串を刺して相争ふことあり、同じく釋紀に私記曰。以穢。刺立田中。爲呪詛之詞。謂之捕穢。若有強稱其田者。身遂滅亡。今世有彼此相争之田者捕穢。是其遺法也。

とあれば、中古まで猶行はれたるマシナヒの法なりとし、第六は伏馬即ちフセムマにて馬を放つて田を荒すことなるべし、といふのである。

(6) 『中臣壽詞』に「天高原仁神留座須。皇親神漏岐神漏美乃命遠持天。八百萬乃神等遠集倍賜天。皇孫尊波。高天原仁事始天。豐葦原乃瑞穗乃國遠。安國止平介所知食天。天都日嗣乃天都天御座仁御座天。天都御膳遠長御膳乃遠御膳止。千秋乃五百秋仁。瑞穗遠平介由庭仁所知食止事依志泰氏。」云々

(7) もと國造、伴造等に出でしものなどその主たるものである。

(8) 『扶桑略記』第二、仁德天皇の四年に「丙子二月。天皇登樓四望。民烟閑寥。仍三月巳酉日。詔曰。自今以後。至于三年。悉除諸國課役。息百姓苦。官舍雖破。暫不修造。及び七年に「巳卯。風雨順時。百姓富寬。五穀豐饒。頌德既滿。四月天皇登樓亦見。詔曰。朕既富足。秋烟繁昌。天皇詠曰。高木屋仁登天見禮者煙立。民乃烟戶者。仁幾波比二計里。」

Turgeon の價值論に關する Gaetan Prou の批評に就て

永田清

Turgeon 父子の合作に成る價值論研究の大作は、近著第二卷、第三卷の上梓を経て略々完成の域に達したるが如くである。第一卷は「アダム・スミス及びフイジオクラアトより現代に至る英吉利並に佛蘭西經濟學者の價值」學說史(一九二五)であり、第二卷は「價值——價值、價格及び富に關する英吉利並に佛蘭西學說の批判」(一九二七)であつて、其の最後の結論に曰く「從來の如何なる學說も價值を完全に説明し得ず」と。斯くして價值論改築の著作たらんとするものは當に第三卷「價值——その心理學的原因と特質」である。

Turgeon の研究分野は甚しく廣大である。即ちその所言に従へば「價值とは經濟學の中心現象であり、本質的觀念である」云々。

然も彼等は價值問題を嚴正なる科學的原理の彼岸に到達せしめんと欲するものである。故に道德觀、平等觀、正義觀と言ふが如き、主題に無縁の要素は之を研究分野外に放逐し去る事となつた。第二卷第一章に於て高唱するところは即ち經濟學の實證科學としての自治獨立權である。是等の點

に於ては、Pirou も Turgeon の所論に賛同する。

多種多様な價值論中、Turgeon の探るところは主觀論に歸する。其の説明態様は、社會學者、數理學者に對立する心理學者の立場に在る。その研究するところは價值であつて、價格ではない。價值原因の研究を一切放棄して價格變動の研究以上に進まざるものを稱して、「本質的に矯正出來ない」(incurablement élémentaire)ものなりと言ふのである(第三卷四四頁)。従つて Turgeon と Augétt や Brouillet の價值表現に對して近來起つた聲高き非難に左袒する。斯くして「價值論が如何に難解であらうとも」、「その秘密を闡明する爲に、勇敢にも人間心理の奥底にまで突入せんとする」ものである。

價值の作用を洞察理解せんとするものは、交換價值の背後に在つて、其の内容は本質上心理的であるところの使用價值の影像を直に看破するであらう。勿論使用價值と效用とを決して混同してはならない。價值なる事象は、稀少性效用、有償效用の存在する場合にのみ生ずる。然し效用は價值の第一構成條件である、價值の原理は人間其れ自體の中に在る。價值の基礎は人間欲望の中に在る。價值の原因は、ある事物に對してもつ願望——該物はある欲望を充し得ると言ふ確信の上に自ら成立する願望の中に在る。價值を徹底的に分析し行く場合に發見するものは、願望と確信、的確に心理的なる此の二つの觀念である。従つて英吉利正統學派の如く、生産費を以て價值の第一義的本質的要素なりとは考へない。此等は全く第二義的であり、單に従屬的條件にすぎないと言ふのが Turgeon の價值綜合論である。

斯くの如く、Turgeon は價值の心理學的方面を強調するのであるが、此の點自ら改革者を以て任ずるものではなく、稱して「佛蘭西學派」と呼ぶものの傳統を踏襲するに過ぎぬと言ふ。Turgeon に従へば、事實上明確に相違する二學派が存在する。一は Smith, Ricardo, Malthus, Senior, Mac Culloch, Stuart Mill に依て代表される英吉利學派であり、價值を勞働・生産費に導くのである。反之、佛蘭西學派は最初より Turgoz, Condillac に由つて、效用を價值なる建築物の要石となし、以後效用に恒久不變の信頼を置いたのである。唯、現代に於ては此等二學派は甚しく相接近して居る。正確に云へば、英吉利學派は其の見界を擴張し、依然として最初の地位を固執して居る佛蘭西學派を包攝し以て、Marshall, Foxwell, Edgeworth, Chapman の如く、價值説明に於ては、必ず效用概念を導入すべしと論ずるのである。

Turgeon が斯くの如く價值の心理的特質を確認せし事は、其の經濟學概念そのものに反響する。此の點を明示すれば、佛蘭西學派に準據して Turgeon の探つた態度は明白となるであらう。Turgeon に従へば、經濟學は心理的事實を對象とするから、その範圍が物理學的若しくは生理學的組織に屬する學理とは根本的に相違する。物理學、生理學は、嚴正なる決定主義に由つて統制される物質に適用されるが故に、屢々數理的に表現され得る必然的法則を表示する事が出來る。然し、經濟學は自由意思の支配する領域を對象とし、従つて、其れだけ確實正確たり得ないのである。斯くして、Turgeon は「經濟學と數學的方法とは眞に矛盾抵觸する」と結論する。

II

Turgeon の此の研究に對して、吾人は多くの點に於て反對論を有する。其の二三を擧ぐれば斯うである。

先づ價值論に關して佛蘭西學派なるものの存在すると云ふ事は、全く不確實であると思ふ。詢に經濟學說史上、新時代を劃したる一七七六年の頃、佛蘭西思想家は英吉利思想家に反對した。即ち Condillac は、Smith の客觀的社會的學說に反して、主觀的心理學的理論を發表した。これは事實である。然し乍ら、問題は斯うである。前二世紀を通じての價值學說史全部を包括的に論ずる場合、果して心理學的傾向を以て佛蘭西學者の特色となし得るや否やと言ふに在る。Turgeon はその然る所以を力説これ努めて居る。然も吾人の觀るところを以てすれば、猶ほこの努力は不成功に終つて居る。何故ならば、フイジオクラアトに就ては論ずるところ少く、偶々「フイジオクラアトの影響」に就て一節を費すも、其の論ずるところは又該學派中に於て異端者の嫌疑を受けたる Turgeon を以て主とするからである。然も最も代表的なるフイジオクラアト特に侍醫 Quesnay の所論を檢査する事に至つては蓋し興味深きところではあるまいか。フイジオクラアトの價值論の特色は、主觀主義でもなく、心理主義でもなく、純生産なるフイジオクラアト學說と最も不思議なる關聯を有する唯物論的客觀主義である。フイジオクラアトの後繼者達は、一時迷つた邪路から直に逃れたと答ふるであらうか。然らば吾人は再び述ぶるであらう——十九世紀を通じて最も卓越せる佛蘭西經濟學者は、主觀的個人的考察よりも、客觀的社會的諸要因のより、重要な所以を認むるに躊躇しなかつた。譬へば J. B. Say である。因より Turgeon は Say を識つて居る。が然し、彼に就てのその解釋は全く誤つて居ると思はれる。(Teilhard, L'Œuvre économique de J. B. Say 參照) Droz, Courcelle-Seneuil, Cherbuliez の場合も亦同様である。此等學者の學說は不思議にも心理學的説明の結構を打破して居る。這般の消息を知れる Turgeon は、彼等を誹謗して言ふ「英吉利學派の影響を受け、佛蘭西學派の異教徒となつた」と。然し乍ら、既に認めたるが如く、佛蘭西學派なるものに包括される諸學者の所說が互に矛盾するもの多く、従つて該學派そのものが聊か任意に定められたるものの如くに思はれる。然も尙、Turgeon は佛蘭西學派を述ぶるに當つて、Cournot に就ては僅かに數頁を費すに過ぎず、Walras に至つては毫も論ずるところがない。若しも佛蘭西經濟學者中、價值理論の説明に最も重大なる貢獻を與へたるものの誰なるやを問ふならば、恐らく Cournot, Walras はその第一に推さるべきものであらう。此の點に於て彼等二人を侮蔑したと言ふ一事は、如何にして辯解されるであらうか。特に Marshall 及び Foxwell は、一九一三年一月附 Charles-Henri Turgeon 宛の書簡に於て Cournot の重要な所以を報知して居るではないか。

詢に佛蘭西學者の價值論より強いてその共通なる特質を抽出せんとするならば、主觀主義よりも寧ろ折衷主義を擧ぐべきである。價值を左右し得る種々雜多の要素、例へば效用及び稀少性、充足されたる満足及び克服されたる困難、供給及び需要の諸條件を認容するが如き定型なき性質こそ、佛蘭西學說の特徴なりと考へるのである。かゝる意味に解して甫めて、生産費説を採る（少くとも Jevons 以前）英吉利學派と、限界效用説を説く埃太利學派とに對立する佛蘭西學派なるものの存在の意義があるのである。固より吾人に從へば、佛蘭西學派なる名辭は全然之を放棄するに如かずで

ある。事實上、折衷主義は、佛蘭西學派の如く、之を運用する著作者の間に於て彼等の採用し結合する諸要素の配劑に一致なき以上、一學派を建設するに充分たり得ないからである。加之、佛蘭西學派、英吉利學派、塊太利學派、亞米利加學派と言ふが如き限定語は、ある程度まで常に誤謬であり、學問上の影響が彌々國際的となるに従つて益々然りである。譬へば Cournot, Jevons の學説は各々その國境を越えてゐる。斯る相互影響は各學派から全く國民的なるあらゆる特質を奪ふのである。Condillac は Jevons く、Cournot は Marshall へ影響して居るではないか。眞理への道は斯くして展けて行くのである。

三

Turgéon の價值論そのものを批評するに當つて、其の公平を期する爲に、便宜上問題を分つて、第一價值の本質と基礎、第二交換價值變動の原因との二とする。其の心理學的説明は、前者に於ては正しく妥當である。然し乍ら、經濟學者の解決すべき當面の問題は後者ではあるまいか。吾人の信ずるところを以てすれば、經濟學者の根本問題は、使用價值に非ずして交換價值であり、價值の本質に非ずして價格變動の原因である。純理經濟學は、社會的事象の一部分たる經濟的事象を以て、其の的確なる研究對象それ自體とすべきである。然るに使用價值は、孤立せる一個人の爲す評價より生ずるが故に、一個の社會的事象たり得ない。故に使用價值の問題は、經濟學の圏外に在りと言はずとも、少くともその限界に在るものである。若し夫れ價值の本質若しくは基礎の檢査に至つては、事象の共存若しくは繼起の必然的關係のみを發見せんとする實證科學の對象から全く離れ去るのである。

詢に經濟價值變動の原因討究に於ては、其の説明の一部分たるべき心理學的諸要因に逢着する。同様に、使用價值は交換價值を支持するものであるから、その研究に導かれる事も亦確である。然し乍ら、經濟學者の携はる實體は、交換價值であり、結局に於て到達すべきものはその説明なりと言ふ一事は、充分なる注意に値する。等しく、經濟學的研究の對象それ自體は、價值の基礎と言ふよりも寧ろ價格の變動であると言ふ事も亦、充分確認しなければならぬ。何となれば、此の立脚點の相違により、研究の原理並に方法が變つて來るからである。此の間に心理學が介入するに従つて、益々問題は個人心理學よりも社會心理學となつて來る。交換價值は、社會的環境の中に、市場に於て自ら成立し、各個人の欲望趣味確信は、此の環境に依つて甚しく影響されるのである。固より Turgéon も此の點を閑却しては居ない(第三卷第八章)。然し乍ら、此の方面にこそ最も力を注ぐべきではなかつたか。かくしたならば、交換並に價格に及ぼす社會性の作用の研究に由つて、甚だ屢々日常生活に於ける個人の行爲を決定する是等社會心理學的諸事象を明瞭にし得たであらう。唯、斯くの如き社會心理學的事象を確認し、その作用を斷定する爲には、最早や自己省察に非ずして、外界觀察に頼らねばならない。斯くして研究對象の變化は、同時に且必然的に、研究方法の變化を惹起する。加之、客觀的に現れる社會心理學的事象は、屢々嚴正なる方式に依つて表示し得る規則性を顯示する。故に Turgéon の主張とは異つて、心理學的諸要因と數學的方式、經濟學と數學との間には何等矛盾接觸はない事となるのである。多數の經濟學者も亦、心理學的經濟學は本質上質的のものである

から、數理經濟學と對立するものであると信する傾向がある。然し乍ら、人間殊に社會人の確信と評價とは、それ自體若干の法則に従ふのである。人間意思の結果は數理的に表示され得るのである。且又交換價值を問題とする場合、價格の水準決定に於て、其の原因たる心理學的要素以外に、之と共に作用するその他諸要素の介在する事が直に看取される。然も一定條件のもとに於ける一定商品例へば自由競争制度のもとに於て再生産し得る商品にとつては、其の價值の基礎は常に客觀的であるから、其の價格法則は主として非心理學的諸要素によつて支配される事となるのである。此の點英吉利正統學派の力を盡して主張したところである。事實上、價格の確定は、時に従ひ場合に應じて變化する比例關係に於て、種々なる要素の共同作用より生ずる。即ちあるものは、需要の諸條件を決定するが故に、購買者の欲望及び排除能力に影響し得る總てのものを包含し、又他のものは供給の諸條件を決定するが故に、生産される數量及び市場に齎らす數量の中出を變じ得る總てのものを包含するのである。

果して此の異質の二元分子より脱れ得るであらうか。塊太利學派は之を試みたのである。而して Turgeon は茲に該學派の獨創を認めるのである。此の學派の限界效用は、效用と稀少性とを單一體とする點に於てその先蹤の稀少性效用と相違する。然し乍ら、Turgeon は述べて「斯くの如き統一は自明の理であり」、「塊太利學派の理論は需要と欲望との分析に於ては卓越して居るが、供給と生産との研究に於ては未だ不充分である」と言ふ。従つて Turgeon は此の二元分子を等しく併用せんとするのである。即ち第三卷の結論に曰く「價值を生産費に導く事は、供給の爲に需要を犠牲にする事であり、價值を消費の欲望に導く事は、需要の爲に供給を犠牲にする事である。交換價值は、それ自體價值を實現する交換の契約として、反對の利益に依つて動かされる二人を登場せしめる。一語を以て盡せば、交換價值は双力的である」と。斯くの如く、交換價值に關しては、純粹に心理的なる説明を避け、頗る廣汎にして包括的なる説明を採つて居る。

然し乍ら、Turgeon は價值の基礎と交換の法則との二問題を充分に區別する事もなく、又此の二問題中、よりの確に經濟學的なる一方を優位に置く事もなく、實證的經濟學には適合せざる古典的心理學の研究並に説明方法を踏襲するにすぎぬ。眞理は自己省察及び推理によつてのみ發見し得ると信じて、自己の仕事の本質は、反省、理論的分析、分類、定義の精細なる勞作たらざる可らずと考へた。此の點に關しては、Turgeon の三卷の著作は、講壇的著述であり、佛蘭西並に英吉利に於ける價值論の大全である。

附記 本稿は *Revue d'Economie Politique* (Juillet-Août 1907, No. 4, p. 1175-1190) に寄られたる Gaetan Prou の論文 "La théorie de la valeur, d'après un livre récent" の大要に聊か私見を交へたるものである。其の目的とするところは、最新の論文を紹介する事によつて、近代に於ける佛蘭西價值學説が奈邊に向ひつゝあるかを指示せんとするに在る Prou は現 *Bordeaux* 法科大學教授にして、よく現代の學說に通曉し、*Die Wirtschaftstheorie der Gegenwart* (1927) 第一卷 *Ge-samtheit der Forschungen in den Einzelnen Ländern* に於ても佛蘭西に於ける近代の學說を廣汎に互つて紹介批評して居る。

堀江歸一教授著作目録補遺

緊急經濟論叢

明・四五、三月

(大勢社)

中央銀行と金銀市場

明・四五、三月

(廠松堂)

第二十二卷

(一九〇)

Turgeon の價值論に關する Gaetan Prou の批評に就て

第二號

105